

真の隣人への愛(ルカ 10:25-37)

今日の聖書には、律法の専門家の一人がイエス様を試そうとして「どうしたら永遠のいのちが得られるんでしょうか」と聞きました。そのときイエス様は、「律法には何と書いてあるのか」と対応しました。と言いますのは、彼らがこのような質問をするとき、大前提があるのです。律法という大前提があつて、イエス様を試そうと質問されるわけです。他の聖書には、金持ちの青年が来て同じ質問をしたときにも同じく答えられました。「律法には何と書いてあるのか」。それが正解ではありません。彼らがそのような大前提をもって聞いているので、それに合わせてイエス様が返事をなさったわけです。すると、彼はよしと思って、「神を愛して、隣人を自分のように愛せよ」と書いてありますよと。それを知らない人はいません。彼がそのように答えたのは、自信満々、私はこれをその通りに守ってますよという思いでそのような返事をしたわけです。それで、「その通りにすればいのちが得られますよ」とイエス様がお話をしたら、その律法の専門家が、「ならばその隣人というのはだれのことですか」と聞いたのです。「神を愛せよ」については言及しません。それは当たり前前に実行しているつもりでしょう。彼らは。神様を愛してますよ。そして、隣人も当然愛しているつもりなのです。なので、永遠のいのちを得るために、イエス様はわたしについてきなさいとおっしゃっているのですが、律法に書いてある通りにやっているから大丈夫ではないかという思いで、「隣人とはだれのことですか」と聞いたときに、彼らの頭の中にはサマリアの人、異邦人が隣人という概念は1mm もありません。たぶん、彼らが自分なりに実行していた愛というものは、同胞イスラエルの人に対してのことだったでしょう。それは充分、私はやったつもりですよという思いを隠して、「隣人とはだれのことですか」と聞いたわけです。そのとき、イエス様はすべてお見通しなのです。彼らは自分が思っている通りに神を愛して、隣人を愛しているはずもないしわけもないわけです。イエス様をご覧になったときには、彼らの勘違いなのです。それに合わせてお話をしていたら、彼はどんどんエスカレートしているわけです。それに対して、ある人が強盗に襲われ半殺しの目に遭い死にかけている、その場面を祭司の一人が見てそのままパスした。レビ人も見てパスした。しかし、あなたがたが獣と思っていたサマリアの人が、その強盗に襲われていた人を見てかわいそうに思い、油を注いで治療をし、それから宿に連れて行き、宿の主人にお金を渡して、「私は用があるので、彼をちゃんと介護して欲しい。もし費用が余計にかかったら帰りにまた払いますよ」。そこまで強盗に遭った人をケアした。それでだれが強盗に襲われた人の隣人なのかと聞いたら、それに対して律法の専門家は何も言うことがありません。そのサマリアの人ですよ。でもサマリアという言葉を使わないのです。ちゃんとケアしたその人が隣人ですよ。あなたもその人のようにやりなさい。つまり、いまイエス様がおっしゃったのは、神様の律法、戒めを守ればいのちが得られるとおっしゃったのは、守れるからではなくて、守るはずがないから私が来たんだよという意味でおっしゃることなのに、彼らは守ってますよ。誰が隣人ですかと聞いたので、あなたがたは、1mm も神の律法を守っていませんよということを言うために、このようなお話をされたわけです。神様の戒めの最高のものは、神様を愛して隣人を愛することなのです。その愛に対して私たちはどのようなイメージを持っているのでしょうか。私たちが愛と言われたときに思い浮かぶそのイメージ、それと聖書が言っている愛のイメージはどう違うのでしょうか。そのことを今日のメッセージを通して確認していきたいと思います。心優しい人は愛ある人だねと私たちはそう思います。何か私のために犠牲を払って良くしてくれるとありがたいし、それを愛だと私たちは思っています。何も惜しまずに私のすべてをあなたのために捧げますよとなると、それが愛だと私たちはそう思っています。でも聖書が言っている愛、特に隣人への愛というものはどんなものなのでしょうか。そのことを今日の聖書のお話、特にイエス様のたとえ話を通して確認していきたいと思います。

1. 人間の霊的破産の状態を知る時、真の隣人への愛は始まる。

強盗に襲われて死にかけている人を登場させたのは、まず第一に、人間の霊的破産の状態が何かを正しく分かったときに、真の隣人への愛は始まるようになります。

人間の霊的破産の状態、強盗に襲われた人のように、人々はそのようにダメな状態なんだということがわからない限り、本当の意味での愛は生まれることはありません。聖書をお読みしたいと思います。

1) ローマ 3:9-18、23、ヨハネ 8:44、エペソ 2:3

ローマ 3:9 から見ますと「では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もない。悟る者はいない。神を求める者はいない。すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない」。靈的に破産の状態です。「彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌で欺く。」「彼らの唇の下にはまむしの毒がある。」

「彼らの口は、呪いと苦みに満ちている。」「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲慘がある。彼らは平和の道を知らない。」「彼らの目の前には、神に対する恐れがない」。

このような状態です。これが異邦人だけではなくて、いま戦争を起こしている人だけではなくて、ユダヤ人も異邦人もです。ローマ 3:23 には、このような話をまとめて「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず」。私はあの人のようなあんな悪ふざけはやったことがないから、あの人より私は少しましだろうと思うことは勘違いなのです。みながうわべがどうであれ、その人の人格や教養、学問の程度がどうであれ、どこの出身なのかと関係なく、みなが同じく神様を離れて罪を犯して破産の状態なのです。なので残念ながら、信じたくないでしょうけれども「あなたがたは、悪魔である父から出た者であって」という身分を抱えています。当然、自分の罪過と罪の中にあって、死んでいたものであって、悪魔サタンに従い、生まれながら神の御怒りを受けるしかない子らとして生まれるものなのです。だれがでしょうか。すべての人が。

2) うわべによる人間の評価(境界線)崩壊

なのに今日の聖書に出ている律法の専門家、イスラエルの人たちは、人のうわべによって人が違うと評価するわけです。私たちは選ばれたユダヤ人、あなたがたは異邦人、サマリアの人々はダメな人間、サマリアの人だから。人間のうわべによる境界線を持っていたわけです。それでそういう中で隣人という概念を勝手に作り上げているわけです。それでは戒めを守ることなどははなから無理だし、不可能なことであり、愛が生まれることもありません。彼らは愛だと自分なりに思い込んでいるのですが、それは永遠のいのちに繋がる、戒めを守る愛とは全く関係ないものなのです。だから本当の愛、永遠のいのちに繋がる愛というものは、人間の靈的な破産の状態が何かわかったときに、今まで持っていたうわべによる人間の評価、境界線などが全部崩壊して行くようになります。異邦人ユダヤ人という境界線が消えてなくなります。あの人を私を、どこの民族、あだこうだという境界線がすべて消えてなくなります。国が違うから違うということはありません。民族が違うから、肌色が違うから、知力が、財力が、体力が違うから、そのうわべの違いによって人間の評価が変わるわけではありません。なぜなのにイスラエル人はそういう評価に走るのでしょうか。人間の靈的破産の状態がわかっていないからです。強盗に襲われている人間の状態がわかっていないからなのです。文化がちがうし、性格も人格も人それぞれ違うでしょう。そのうわべがその人の本当の意味での評価を左右するものではありません、なのに、靈的破産状態がわかっていないと、ついついうわべによって人間を評価し、境界線を作ることになります。そこには本当の意味での愛、特に隣人への愛というものは存在しません。

3) すべての人が隣人(誰が隣人ですか???)

人間の靈的破産状態が本当にわかって心から認めるようになれば、すべての人が隣人になります。すべての人に神様の救いが必要になります。ユダヤ人だから、真面目な人間だから、そんなのいないよ。私のようにデタラメな人間には救いが必要かもしれませんが、そういう考え方がすべて間違いなのです。そういう意味で、この律法の専門家の「だれが隣人ですか」という質問自体が無理なのです。誰が隣人ですかという質問を裏側には、サマリアの人などは隣人ではありません。私は隣人を充分思いやり、かまってきた、愛してきましたと言うつもりで言ったでしょうけれども、イエス様は見事に「あなたはだれが隣人なのかも分かっていないし、あなたが思っている今自慢している愛というものは愛ではありません。つまり、あなたは律法を徹底的に守っているつもりなのですが、永遠のいのちとは 1mm もあなたとは関係ありません」という話をしていられっしやるわけです。

4) すべての人に救いの恵みが必要(ガラテヤ 3:28)

すべての人に救いの恵みが必要であることに気づくようになります。このときから本当の意味で愛が始まります。何が愛なのか改めないといけません。ガラテヤ 3:28 には「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです」。いま世界中が混乱し、戦争が起きていて、また銃や爆弾による戦争ではなくてもみな戦争の状態ではないでしょうか。その根底の方には人間の霊的破産の状態がわかっていないので、うわべよって人を評価するため、アメリカファーストとかジャパンファーストとかになるわけです。別に自分の国を大事にすることは悪くはありませんが、人間の本当の実態が何かわかっていないからそういう風に走るしかないわけです。国のレベルでもそうだし、個人のレベルも同じです。誰かと誰かと比べて自慢げになることと劣等感を覚えることとみな一緒です。まずそんなに比べたがるのでしょうか。歌の歌詞ではありませんが。人間の強盗に襲われた霊的破産の状態が実はわかっていないから。残念なのはクリスチャンの私たちもこれに気づいていないので未信者とレベルがあまり変わらないのです。なので、信者だけに許されている愛なのに、信者にこの愛がなかなか見ることができないのです。今日のメッセージを通して、皆さん自分自身を改めて、残りの生涯、本当の意味で隣人を愛する人生を歩んでいただきたいと思います。人間の霊的破産の状態を正しく知るときに、隣人への愛は始まることになります。なぜなのでしょう。うわべによるすべての境界線が崩れない限り、本当の意味での愛はそこには存在しません。

2. 真の隣人への愛は、霊的破産者への唯一の答えキリストを与えることである。

それから、ならば隣人への本当の愛というものは、霊的破産の人々に対して唯一の答え、キリストを分け与えることこそ真の愛なのです。

いまイエス様がおっしゃりたい内容はその内容です。このことがわかっていないので、教会に通いながら、レムナントの時からこれを刻印して味わうべきなのに、いつまで経っても人の愛情にこだわり、人の愛情に左右されるレムナントのままなのです。隣人への本当の愛は、霊的破産の人々に絶対唯一必要な答えであるキリストを分け与えることこそ愛なのです。

1) 神様の愛(ヨハネ 3:16)-サンプル

その愛のモデル、サンプルが神様が罪人の滅びの子である私たちを愛してくださった、その神様の愛に見られるものなのです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。御子イエス・キリストをこの世に与えられたことが神様の愛なのです。そこから愛を学ばなければいけません。どこで皆さんは愛を見て見習おうとしていらっしゃるのでしょうか。そこに本当の愛はあるのでしょうか。ついついコマーシャルが出ようとする…そこに愛はありません。神様の愛の他には、私たちが見て学ぶべき愛は存在しません。その神の愛を受けて神の愛にふれていた人々が隣人を愛することができるわけです。

2) ペテロの愛-使徒 3:6、パウロの愛-ピリピ 1:18

ペテロは言いました。私にあるものをあなたにあげようと。それが愛なのです。神様が罪人の滅びるしかない私たち、絶対解決不可能な問題を抱えている私たちのためにキリストを与えられたその愛に魅せられて、その愛が私の方に届いたので、その愛をもって私もそのキリストを与えることが愛なのです。私にあるものをあなたにあげよう。なぜでしょうか。お金も必要でしょう。愛情も必要でしょう。それは後の話です。その人に強盗に襲われた霊的破産の状態が本当に見えてきたら、その人に絶対必要なのはキリストなのです。なのにクリスチャンのの私たちにそれが見えないから、余計な争いに巻き込まれることになるわけです。パウロも言いました。ピリピ 1:18、するとどうということになりますか。つまり「見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいきます」。パウロを妬んでキリストを伝える者、パウロのことを思いやってキリストを伝える者がいました。どっちでもキリストが伝えられることであれば私は喜んでいきます。これがパウロの愛なのです。

3) たましいの救いのための伝道と宣教

言葉を変えますと、霊的破産の状態におかれている人のたましいの救いのために行っている伝道と宣教こ

それが隣人への真の愛なのです。隣人に対して優しく接する他の動機や他の理由などはありません。たましいの救いというひとつの理由で。強盗に襲われて死にかけている、正確に申し上げると、霊的には死んだままの状態です。非常に心優しい旦那さんも、非常に私のことを思いやってくれる奥さんも、強盗に襲われて死んでいる状態であることが見えてこない、本当の意味での夫婦の愛も期待できません。何が愛でしょうか。愛、愛、愛。特に日本の場合は、愛という言葉に非常にこだわっています。教会に行きますと、「神は愛なり」。嘘ではありません。でも、神は愛なりと言ったとき、彼らは何をイメージしているのでしょうか。もしかして律法の専門家と同じようなレベルだったのかもしれないし、あるいは今まで傷ついて愛情とかけ離れた人生を歩いてきた者が、その愛情のことをイメージして神様、神様と言っても神様がなかなか感じられないので、教会の牧師や信徒の方々からそれを感じたいと思って来るが、なかなか感じられないときようならになる。もちろん教会にそのような愛情は求められるものなのです。しかし、それは意味が違います。何が愛なのでしょう。まず、うわべによる人への境界線が全部崩壊していかない限り、愛は期待できません。それが崩壊するためには、人の霊的破産の状態が見えて来ないといけません。優しいから良い人間でしょうか。ただ私を助けてくれるから良い人間でしょうか。国のために尽くしているから良い人間でしょうか。必要なことに間違いありませんが、それを愛とは言えません。人間の霊的破産の状態、どうしようもない霊的な問題、それが見えてこない限りは、人と接すること、どういうふうにして人と接するべきなのか、なぜこの人と出くわしたのか等々の意味が理解できません。いつも優しい人ばかり求めて、そうでないと会社も違う会社に。なぜ私と正反対の人と合わせてくれたのか。このたましいの救いという目的を軸にして見ない限りは、私とあまり相性が合わない人の場合、愛することができないでしょう。それこそ愛が必要なのに。他の動機、理由、すべてなくして一つだけ、たましいの救い。破産の状態から助けられることのための福音宣教、そこにのみ真の愛があります。

4) たましいの救い(伝道、宣教)を軸にする調節と導き、姿勢

なので、このたましいの救い、伝道と宣教ををメイン軸にして、それに益になるように、それに有利になるようにすべてを調節しながら導かれて、そのための姿勢をとることを愛と言います。ただ優しくしてあげるから愛ではなくて、たましいを救いという絶対的な目的、本当の意味で愛という理由があるから、それをメインにして調整するわけです。だから譲り受け入れて超越して挑戦したり、そういう姿勢をとることになります。聖書の特に、パウロの手紙の後半の部分を見ますと、こうしなさい、ああしなさいといわれます。それは単に行いをこうようにしなさいという意味ではありません。あなたがたはこの神の愛をいただいている者、またこの神の愛を実践して行かないといけない者なので、それに合わせてこうすべきではない、ああすべきではないのかというお話なのです。それが愛です。言葉は同じ言葉であっても意味が全然違います。なんでも元々性格が良いから優しくしてあげるのではなくて、この確かな目的、霊的破産の状態が見えたので、そこに絶対必要なキリストを与える本当の意味で愛を中心にして時刻表を見ながら、とんでもないことなのに譲るのがそれに有利だと思うと譲るのです。私がありません。私はキリストとともに十字架で死にました。それを愛と言います。自分の主張した方がそれに有利ならば主張するのですが、自分の主張が正しくてもそれに有利でないと判断した時には導かれて黙ってパスしたりするわけです。理由があるから。それを愛と言います。

なので残りの生涯、神を愛するということは、神がキリストを通して私を愛したことを1mmも疑わずに信じて感謝すること、それが神を愛することです。そして、残りの課題は、隣人を愛することです。人々の霊的破産の状態が見えてくるように祈らないといけません。彼らに絶対必要なキリストを与えていく、その本当の意味で愛を軸にして残りの生涯をその都度、その都度、聖霊に導かれることです。私たちにはそのような能力がないので、だから聖霊の力を求めるわけです。それが愛です。変に良い言葉だから、良いフレーズなんだからとむやみにとりあげると、また律法に戻るのです。聖書の話はそういう意味で私たちに指示している話ではありません。

結論を言いましょうか。そういう意味で、この世の中には救いが必要な人間、そして、その救いを味わうべき人間、その救いを伝えるべき人間、3種類の人間しか存在しないということをクリスチャンの私たちは心に留めましょう。いろいろな人がいるけれども。だから、未信者の中に羨ましい人がいてはいけません。もちろんこの救いを伝えることに用いられている信者を見ると羨ましいなと思う。そういう意味では

ありなのですが、アイドルだから、すごい注目を浴びているから、世界的に影響を与えているから羨ましいと思うのはおかしいことなのです。霊的破産の状態が見えてこないから。そういううわべによる境界が全部崩れることで、世界的に影響を与えている、電気自動車によって大統領と結託している人を見たときにも救いが必要な人間なんだ、2回目の当選をされて勢いに乗っているああいうおじいさんを見たときにも救いが必要なのに。その目で見ないといけません。そして、その救いを味わうべき人間がクリスチャンの私たちなのです。なのにいつも何を食べるか、何を飲むかばかりこだわって、心配ばかりして、昔の傷ばかりこだわって、自分の枠から一步も出られないまま他の人とのすべてを全部遮断してしまう。クリスチャンなのに。自分の思い込みしかこだわらない。自分の枠の中に閉じ込められてなかなか出られない。そういう人々が救いを味わうべき人なのです。クリスチャンはそれを非難されたり攻められたりするような者ではなくて、キリストを、救いを味わうべきなのにまだよくわかっていないんだと救いを味わうべき人間として見て、その部分を助けてあげないといけません。そして、その救いを伝えるべき人、救いを味わっていれば、そのような人になるようになります。そういう人が正しく現場と向き合って、この救いを伝える最高の祝福を味わうことができるに手伝うようになるでしょう。この3種類の人間しかいないことを心に留めないといけません。そして、隣人を愛することはクリスチャンだけに可能であり、クリスチャンの特権であるということを感じて、これを握って祈りましょう。何を食べるか、何を飲むか、何を着ようかということをも求めないで、神の国と義を求めると。それを握って祈りましょう。ローマの植民地どうのこうの、それはあなたがたは知らなくてもいいよ。聖霊が臨まれると、力を得て、エルサレムから地の果てにまでわたしの証人となる。これを握って隣人を愛する残りの人生を歩んでいくために祈っていきましょう。皆さんと関係している人々、家族をはじめ友だち、仕事を関係の人、とにかく関係している人々。今日から彼らの名前を書いて思って考えてみてください。彼らの霊的破産の状態を正しく見るようにしなければいけません。これが愛です。そうすると、まずは関係している人々に対しての思い、考えが変わるようになっていきます。それで考えて考えて、皆さんと関わっている人々に救いの恵みが本当に必要なのだと心から告白できるまで考えてください。祈りつつ考えて考えてください。アメリカとアフリカのことを考える前に、まず皆さんと関わっている人々について。それで心から彼らに福音が伝えられるように祈り始めるようにしてください。それが愛です。本当に愛をもって彼らに福音が伝えられるように祈っててください。何も疑わないで感謝をもって。あ、なるほど、それで私がその人々と関わるようになったんだねということが分かるようになっていきます。何の意味もなく神様が出くわしてくださったわけではありません。皆さんがクリスチャンだから。このいのちのキリストを分け与えることができる唯一の存在だから、つまり隣人を愛する唯一のことができる唯一の存在だから。だから関係を神様が許されたわけです。今まで皆さんがその関係について思っていたそれを全部修正して行かないといけません。ああ、なるほどと霊的破産の状態が見えてきた時に、自分がなぜその人々と関わるようになったのかという意味が分かるようになります。だから祈るのです。そうすると、この通りになって祈れば、必ず福音をお話しする機会が許されるはず。その時を待ちつつ祈っててください。それで機会が許された時に、隣人を愛する思いで、強盗に襲われた人々の面倒をみてあげたサマリアの人のように、彼らに自分のキリストと出会いましたというおあかしをしてあげること。それで聞く耳を持っていれば、皆さん自らキリストの福音を、救いの道を正しく語ってあげるか、そこまで自信がない場合は、おあかしをして興味を持ってもらった時には、「どう？うちの教会の牧師に一度会って見ないか？」と勧めることも可能なのです。それでOKでなければ終わりでもいいのです。OKならば日にちを決めて連絡を取りあって、それで皆さま周りの人々から本当の意味で愛の素晴らしい祝福が具体的に現われるように。皆さんがサマリア人のように神様に用いられるように。神様はそういう機会を私たちに生まれたときから許していらっしゃるのに、私たちが気づいていないだけなのです。あの人間はダメ、あの人は嫌だ。こういううわべによって自分勝手に評価して、愛の全ての通路を全部ふさいでしまいました。自分で。誰の仕業なのでしょう。皆さんには人を愛する特権があります。他の人には不可能なのです。ぜひ隣人を愛する真の愛の使者として残りの生涯を勝利していただきましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。クリスチャンの自分が神にどのように愛されているのか。そして、隣人を愛することは何なのか。よく黙想して残りの生涯、すべての境界線が崩れて救いが必要な

たましいとして見て、彼らを本当の意味で愛することができる伝道者としての残りの生涯を歩いていけるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。